

いわゆる心内発話について

—発話動詞としてみた「思う」—

阿部二郎

キーワード：心内発話、思考動詞、発話動詞、引用句、発話行為

1 はじめに

「～と思う」の形で「思う」が受ける「～と」は「心内発話¹⁾」、「心内語²⁾」などと呼ばれることがある。これは「～と言う」における「～と」に似て、一種の発話ともとれる文や語の形をしたものを「と」が受けているためと考えられる。以下これを「心内発話」と呼ぶことにする。ただし「心内～」とつくり通りそれは実際に音声として現れたものではなく、主体がイメージとしての言語的音声を頭の内部で並べたものと考えられる。

「～と思う」は「思う」類の動詞すなわち思考動詞が心内発話を補語にとることで、もとの思考の場とは異なる場で心内発話を再現しているものと捉えられる。これは「～と言う」において「言う」類の発話動詞が発話を補語にとることで、もとの発話の場とは異なる場で発話を再現しているという図式に当てはめて考えることができそうである。ただし、「～と思う」の「～と」は実際の発話ではない以上実際の発話を引用する場合よりも制限が見られる。たとえば (1) では「言う」が「散歩に行きましょう」という発話を受けているが、(2) のように「思う」でこれを受けるとはできない。

(1) 「散歩に行きましょう」と言った。

(2) *「散歩に行きましょう」と思った。

また、発話動詞が「～と…する」の形（以下これを「引用構文」と呼ぶ）で用いられる場合における引用内容すなわち「～」の部分と発話動詞の関係について発話行為論 (Speech Act Theory) の観点を取りこんだ研究がなされている³⁾が、発話動詞と同じく引用構文を形成する思考動詞と引用内容の関係について分析を行った場合、両者の関係はどのように捉えることができるであろうか。

本稿は発話と心内発話の類似点および相違点について考察し、発話動詞の上位・下位分類を参考に思考動詞の上位・下位分類を試みる。ここから思考動詞「思う」を発話動詞として見ることができるかどうか考察する。

2 発話と心内発話

先に見た (1) と (2) における容認性の違いは聞き手の存在の有無に関係している。「行きましょう」という表現は勧誘を表しており、勧誘という行為は勧誘の相手が存在してはじめて意味をなすものである。「言う」は外的⁴言語活動を表す。外的言語活動は聞き手の存在を想定し得るから勧誘表現と衝突しないが、「思う」は意味的に主体の思考や心内での(仮想的な)発話を表すものであるから通常聞き手は想定されない。従って (2) では勧誘の持つ意味・機能が「思う」と衝突している。

思考動詞において聞き手が想定されないということは、発話動詞において発話の相手を示す二格の名詞句を思考動詞が補語としてとることができない⁵ことから確認できる。⁶

- (3) a. 私は改札口にいた若い駅員に切符を失くしたと言った。(世界)
b. *私は改札口にいた若い駅員に切符を失くしたと思った。
c. 私は切符を失くしたと思った。

この聞き手が存在しないという点に関して、心内発話は独話と類似していることが先行研究で指摘されている。たとえば三上(1953)は「内的話法」すなわち心内発話が「思い言葉であって、せいぜい自問自答のひとりごと」(三上 1953: p.342)であるとしている。また仁田(1991)は、ある種のモダリティ的な意味を表す形式が現れる条件と聞き手の存在の有無との相関をはかるために「~と思う」に埋め込めるか否かというテストをしている。さらに森山(1997)は独り言そのものの認定について考察することで、独話や思考といった、言語の非伝達的な側面について考察している。このように心内発話は独話とともに伝達を意図しない発話の一種と捉えられる。

「心内発話」は「思考」の内容を表している。しかし、「心内発話」だけが「思考」のすべてというわけではない。これについては森山(1997)が、人間の意識には「言語的思考」と「非言語的思考」の二つの思考があり、心内発話は前者に相当するということを述べている。両者の違いは、「非言語的思考」が同時並列処理的に複数のことを処理できるのに対して「言語的思考」では線条的な言語コードとして処理されるという点にあるとされる。この言語的思考における線条的性質について森山は、言語的思考には常に以下のような「思考の展開」があるとして説明してい

る。

言語的思考においては、ある時間において意識に上っていることがらと、言語的に一つのまとまった独り言（心内文）を形成し終わった次の時間に意識に上っていることがらとは、情報的に違ったものになっているはずである。（森山 1997: p.176）

森山（1997）は実際に「思考の展開」の認められない文が独話（独り言）になりえないことを例とともに示している。

(4) #私は帰る。（森山 1997: p.178）

この「私は帰る」という発話は話し手にとって自明の自分の意志を表すため、思考の展開とは言えない。この発話が独り言として不自然に感じられるのは思考の展開がないからである。

心内発話もやはり思考の展開が必要であることが以下の例が不自然であることからわかる。

(5) #私は帰ると思った。

ここから、心内発話は思考の中でも物理的な言語発話と同じように線条的な性質を持ったものであり、この点において独話と並行的なものと考えられる。

本節では先行研究を参照しつつ引用動詞すなわち「～と」を必須の補語としてとり得る動詞が聞き手の有無にもとづいて「言う」類の発話動詞と「思う」類の思考動詞に分類されること、さらにこの聞き手の不在ということから「～と思う」という形式における「～」すなわち心内発話が独話と類似的な一種の「発話」と捉えられるということを見た。

前述したように発話動詞は発話行為論的観点を取りこんだ分類がされているが、聞き手の存在しない「発話」を引用する思考動詞においても発話動詞に相当する捉え方をすることはできないであろうか。その点を究明するための準備段階として、次節ではまず発話動詞の発話行為論的観点からの分類について見ていく。

3 発話動詞における発話行為論的分析

藤田（1986）は引用句すなわち「～と」と主節の述部の結びつき方を整理している。そこではまず大きく次の二つに分類⁹がなされている。

- (6) { α 類：述部が引用句の発言・思考と共存する動作・状態を表す。
 例： 「おはよう」と入ってきた。
 β 類：述部が引用句の発言・思考が事実上等しい動作・状態を表す。
 例： 「おはよう」と言った。

さらに「 β 類」において、主節の述部が引用句とどのような関係にあるかを述部に即して以下のように下位分類している。

- (7) 1. 発言等を外的・形式的に特徴づけるもの
- a. 発言過程の様子について（口調・アクセント・音調等）
 - b. 会話の流れの中でのふるまい方について
 - c. 引用される発言についての引用した話し手の評価
2. 心の状態を特徴づけるもの
3. 発語内行為の観点からの特徴づけ
4. 発語媒介行為の観点からの特徴づけ (藤田 1986: p. 221)

このうち3、4ではそれぞれ「発語内行為」「発語媒介行為」という用語が使われているが、これは発話行為論と呼ばれる理論における概念である。ここでJ. L. Austinによる発話行為論を概観しておく。

Austin (1962) は発話を以下の三段階の行為に分類している。

- 発語行為 (locutionary act)
- 発語内行為 (illocutionary act)
- 発語媒介行為 (perlocutionary act)

たとえば声に出してなにごとかを「言う」という行為そのものは発語行為⁹と呼ばれる。発語行為は「ばぶばぶ」のように無意味な音声であってもかまわない。しかし「金を返す」と言った場合、この発話は単になにごとかを「言う」行為すなわち発語行為だけでなく、同時に場面に応じて意志や予定の表明、約束などといった行為を遂行している。これが発語内行為である。さらにこの発話によって聞き手が安心したり、納得したりするなど、参加者の感情、思考、行為に対して結果としてのなんらかの効果を生じればそれは発語媒介行為となる。

藤田（1986）は（7）の1～4の分類の実例として次のようなものを挙げている¹⁰。

- (8) 「為方がないんだ」とふてぶてしい声を出した。→ 1
(9) いっそ転業してしまおうか、と考えたりするが、… → 2
(10) ゆりが鬼にさらわれたと告げる。 → 3
(11) 「さっさとおまえのおやじの先生だった杉田家へ行け」と長英を追い出してしまった。 → 4

(8) では、「為方がないんだ」という発話が「ふてぶてしい声を出した」という述語で外的に特徴づけられており、(10) では「ゆりが鬼にさらわれた」という発話が報告するという発語内行為であることを「告げる」という（陳述表示型）述語が表している。

砂川（1989）はさらに「発語行為と発語内行為のカテゴリーを特定する動詞は、その性質上、常に引用動詞である」（砂川 1989: p.366）とした上で引用動詞が発語行為のみに関わるものとするでない（発語内行為も表しうる）ものに分類することができる¹¹ことを指摘している。すなわち「言う」「叫ぶ」「つぶやく」「ささやく」などは何の発語の力（illocutionary force）も持たない無意味語や無意味な音声の連なりをも引用句にとることができる¹²ことから発語行為のみに関わるとしている。たとえば「金を返すと言った」という表現からは「約束」という行為の遂行が読みとれるかもしれないが、それはあくまで「金を返す」という引用内容からの推論であって、「言う」は発語内行為に関しては中立的である¹²。また加えて言えば、砂川の挙げている発語行為専用の引用動詞のうち「叫ぶ」「つぶやく」「ささやく」などは発話の音声の様態を描写するものであるが「言う」は発話の様態に関しても中立的であるといえる。

「言う」が発語内行為に関して中立的であることは以下のことから観察できる。

- (12) a. 私は二人組がやってきて、頭骨を探しまわっていったと説明し、(世界)
b. そして、暑いのでクーラーを入れてくれと頼みました。(錦織)
c. でも彼は…(中略)…もしペトログラード大学のさる教授にそれを届けてくれたなら、かなりの額の謝礼をやると約束したのよ。(世界)

これらはいずれも（7）の3に分類されているように下線部の動詞が「～と」で示される発話がどのような（発語内）行為であるかを特徴づけている。ここで、それぞれの動詞は以下に見るように不自然な表現になることなく「言う」と置き換えることができる。

- (13) a. 私は二人組がやってきて、頭骨を探しまわっていったと言い、
 b. そして、暑いのでクーラーを入れてくれと言いました。
 c. でも彼は… (中略) …もしペトログラード大学のさる教授にそれを届けてくれた
 なら、かなりの額の謝礼をやると言ったのよ。

しかしこれとは逆の操作によって (13) の「言う」をそれぞれ全く任意の発話動詞に置き換えることは必ずしも可能ではない。

- (14) a. #私は二人組がやってきて、頭骨を探しまわっていったと約束し、
 b. #そして、暑いのでクーラーを入れてくれと説明しました。
 c. #でも彼は… (中略) …もしペトログラード大学のさる教授にそれを届けてくれ
 たなら、かなりの額の謝礼をやると賞賛したのよ。

これは「～と」で示される発話が主節の発話動詞によって適切に特徴づけられているとは考えにくいということに起因していると考えられる。これは発話行為論によって次のように説明することができる。

Austin (1962) は、「私は必ず金を返すと約束します」のように発語内行為を明示する遂行動詞 (ここでは「約束する」) が顕在する文を主に扱っており、これを「顕在的な遂行的発言」と呼んでいる。一方で「私は必ず金を返します」のように遂行動詞が表面上現れていないが、その発話自体がある発語内行為と捉えられる文を「原初的な遂行的発言 (primary performative)」と呼び、顕在的な遂行的発言と分類している。Austin によれば、この「原初的な遂行的発言」は (常に可能とは限らないものの) 「顕在的な遂行的発言」に還元できる場合があるという。その際の「還元」の手がかりとして Austin は以下の要因を挙げている。

- (15) 1. 法 (mood)
 2. 声の調子 (tone of voice)、抑揚 (cadence)、強調 (emphasis)
 3. 副詞 (adverb) と副詞句 (adverbial phrase)
 4. 接辞小辞 (connecting particle)
 5. 発言に随伴するもの (accompaniments of the utterance)
 6. 発言の状況 (the circumstances of the utterance)

(12) では引用句で示される発話 (たとえば「クーラーを入れてくれ」) が発話動詞 (「頼む」)

によって「原初的な遂行的発言」（この例では「依頼行為」）として解釈されている。実際「クーラーを入れてくれ」という発話は「依頼」という行為に還元することができる。一方、同じ発話を「説明」という行為に還元することは適切ではない。これは「～てくれ」という表現が「説明」という行為に還元できない¹³からである。他に動詞の命令形や「～たい」なども「説明」に還元することはできない。(14) では引用内容から還元し得る行為と主節に現れている動詞の表す行為がかみ合っていないため不適切な表現となっている。

ところで上に見たほかに「言う」以外の発話動詞にはどのようなものがあるだろうか。藤田(1986)は日本語における「遂行動詞の基本範疇」として以下のものを挙げている(藤田 1986: p.225-226)。

(16) a. 陳述表示型…事態、状況の記述、情報提示。

ex. 断言する、主張する、告げる 等

b. 行為指導型…聞き手に所定の行為の義務を課し、それを行わせる。

ex. 命じる、頼む、勧める、助言する 等

c. 行為拘束型…話し手が所定の行為を行う義務を負い、これを行う。

ex. 約束する、誓う、申し出る 等

d. 態度表明型…話し手による事態・状況に対する心的態度の表明。

ex. 謝罪する、賞賛する、感謝する 等

e. 宣告命名型…発言内容の示すような新たな事態・状況の具現化。

ex. 命名する、宣告する、宣言する 等

これらのいずれの動詞に対しても(12)-(14)のテストが適用できる。このように「言う」はその他の発話動詞とある意味で必要条件的とも言える関係にある。つまり「言う」は発話動詞の中にあって上位語としての位置を占めていると考えられる。

4 思考動詞の分析

前節では発話動詞の発話行為論的観点からの分析を概観し、発語行為のみを表すという点において「言う」が他の発話動詞の上位語となっていることを見た。2節では「思う」が聞き手を想定しない特殊な発話の一種と捉えられることを見たが、では発話動詞に対する分析に相当する分析を思考動詞にも適用することは可能であろうか。砂川(1989)は前節に見たように発話行為論的観点から発話動詞の分類をしつつ、思考動詞においても同種の分類ができる可能性があるこ

とを示唆している¹⁴。

ただし心内発話は聞き手を想定しない発話であるから、聞き手の存在を前提とした (16) のような分類範疇をそのまま当てはめることはできない。

このように発話行為論的観点を取り込んだ分析をそのまま思考動詞に当てはめることは困難であるが、なおもって「思う」とそれ以外の思考動詞には「言う」とそれ以外の発話動詞に見られるような上位・下位関係があるということが以下のことから観察される。

- (17) a. 祖母は、人間は死んでも必ずいつかまた生まれてくると信じていたようだ。(錦織)
b. きっとその件について、根掘り葉掘り訊かれるかもしれないと予想していましたが、…(錦織)
c. 先生には前々から一度でいいから会ってお話したいと願っていました(花埋)

これらは (9) と同じく (7) の 2 の分類、すなわち「心の状態を特徴づけるもの」に相当する。つまり、下線を引いた主節の動詞によって「～と」で表される発話が心内発話であり、かつその心内発話がどういったタイプの思考であるかが特徴づけ(名付け)られている。

ここで先ほど発話動詞に対して (12)-(14) において行ったのと同じテストを試みる。まずは、(17) で下線が引かれている動詞をそれぞれ「思う」に置き換えてみる。

- (18) a. 祖母は、人間は死んでも必ずいつかまた生まれてくると思っていたようだ。
b. きっとその件について、根掘り葉掘り訊かれるかもしれないと思っていましたが、…
c. 先生には前々から一度でいいから会ってお話したいと思ってました

発話動詞の場合と同じく、不自然な表現になることなくそれぞれの思考動詞を「思う」に置き換えることができる。次にこれらを任意の別の思考動詞に置き換えてみる。

- (19) a. #祖母は、人間は死んでも必ずいつかまた生まれてくると願っていたようだ。
b. #きっとその件について、根掘り葉掘り訊かれるかもしれないと企んでいましたが、…
c. #先生には前々から一度でいいから会ってお話したいと疑ってました

ここでも発話動詞の場合と同じく、心内発話の内容と思考動詞の組み合わせに制限が見られる。

「言う」を除いた発話動詞では (12) で見たように、それ自身が表す発話内行為と引用句が示

す発話内容に対応が見られた。次節では思考動詞と引用句の対応について具体的に見ていく。

4.1 思考動詞と心内発話

本稿では思考動詞と引用句の対応の分析にあたって森山（1988）の「報告動詞分析」を参考に
する。(16)に見たような遂行動詞は、いずれも単数一人称主語、単数二人称目的語、直説法現
在時制という状況で用いられることで「発話の力」を帯びる、すなわち発話内行為を表すよう
なるものに限られる。前節でも述べたように遂行動詞を用いた分析は単数二人称目的語の想定で
きない思考動詞には適用できない。これに対し「報告動詞分析」とは概略、発話が「発話の力」
を帯びる状況に限らず、どのようなカテゴリーの発話があったかを報告する動詞（「報告する」「表
明する」「命ずる」など）を「報告動詞」と呼び、ある発話がどの報告動詞によって報告されう
かを見ることで文の表現的な意味を考えるものである。つまり先に見た遂行動詞分析の手法を用
いつつ、文のタイプを「発話の力」が介在するカテゴリー（発話内行為を表す文）に限定するこ
となく観察する分析である。

森山（1988）は報告動詞分析にもとづいて文のムード表現的な分類とその典型的な形式を概略
以下のように示している¹⁵。

(20)	述定	{ 事実報告	φ
		{ 蓋然性	～だろう、～はずだ、～らしい、～そうだ
	表出		～したい、～してほしい
	広義命令		命令形
	意志		～しよう

報告動詞分析は発話のカテゴリーを報告する動詞に関するものであるが、本稿では思考のカテ
ゴリーを報告する動詞（すなわち思考動詞）に関してどの形式がどの思考動詞と結びつきうるか
について観察する。

思考動詞をその意味にもとづいて暫定的に分類すると以下のようなものが挙げられる¹⁶。

(21) a. 願望：ある事態の実現を望む。

願う、望む、祈る

b. 意図：ある事態の主体自身による実現を計る。

意図する、企む、もくろむ、決心する、決意する

- c. 判断：未経験の事態の成立／未成立やことがらの真偽について判定する。
判断する、推定する、推測する、予想する
- d. 仮定：事実とは無関係に、ある事態が成立するものとみなす。
仮定する、想定する
- e. 誤解：事実と異なることがらを真と判断する。
誤解する、勘違いする、思いこむ
- f. 信念：根拠の有無に関わらず、あることがらを真であるとみなす。
信じる、確信する
- g. 懐疑：ある事態の成立を否定的にとらえる。
疑う、怪しむ
- h. 価値判断：ある事態に対して情緒的に反応したり、評価を下す。
後悔する、恐れる、心配する

以下では、森山（1988）の挙げているムード表現のカテゴリーとこれら思考動詞の対応について観察する。

4.1.1. 「φ」

報告動詞分析において「事実報告」のムード表現と分析されている文末の「φ」は思考動詞においては「想定する」「判断する」「信じる」「思いこむ」などと結びつき、ある事態が実際に起こる（起こった）と主体がとらえていること示す。

(22) 彼は、これらの人の感情的な反撥も、西欧の援助を具体的に示せば消えると信じていた。(コン)

4.1.2. 「～だろう」「～はずだ」「～らしい」

「～だろう」「～はずだ」という心内発話は「推定する」「予想する」などと結びつき、主体がある事態が起こる（起こった）ことを蓋然的に判断していることを示す。

(23) 恐らく、あの家はまだあのまんまになっているだろうと予想しながら。(風立)

このほかに蓋然性を表す形式として「～違いない」「～はずだ」などがあるが、いずれも「～だろう」と同様である。

しかし同じ蓋然性を表す形式でも「～らしい」はこれらの思考動詞と結びつきにくいようである。これは報告動詞において話し手にとって不確実な情報を表示することと関係があるかもしれない。また同じく蓋然性の低い「～かもしれない」なども結びつきにくいようである。

4.1.3. 「～そうだ」

「～そうだ」は伝聞を表す形式であるがゆえに心内発話では現れ得ない。したがって「～そうだ」と結びつく思考動詞は存在しない。

(24) *彼が来てくれるそうだと考えていた。

4.1.4. 「～したい」「～してほしい」

これらは「願う」「望む」などと結びつく。この形式の現れる心内発話は主体の心的態度を表す。

(25) 先生には前々から一度でいいから会ってお話したいと願っていました

このほか「～してくれ」のように心内発話が依頼を表す形をとる場合もある。

4.1.5. 命令形

心内発話は聞き手を想定しないため基本的に命令形は現れないが、例外は存在する。たとえば、

(26) 「このやろう金返せ」と思ったけど、口には出さなかった。

のようにあたかも相手のいるような心内発話を表す場合には命令形と「思う」が結びつくこともある。仁田(1980)はこうした表現が実質的には命令として機能していないことから「放任とでも言えばよいような、一種の心的態度」(仁田 1980: p.190)と分析している。

4.1.6. 「～しよう」

これは「意図する」「企む」などと結びつく。この場合の心内発話はある事態の実現に向けて主体の行動を拘束するもの、つまり主体の意志を表していると考えられる。

(27) 外へ、戸外へ出てみようと思図したのである。(檢家)

このほか「後悔する」「恐れる」などの価値判断を表す動詞についてはここにあげたような文末

ムードだけでは分類しきれないが、引用内容にある種の傾向は見られる。

(28) a. 私はそんなことを言い出さなければよかったと後悔した。(一瞬)

b. #私はそんなことを言い出さなければよいと後悔した。

(29) a. 病状にさわりはしないかと恐れるあまり、… (塩狩)

b. #病状にさわりはしないと恐れるあまり、…

4.1.7. 「～か」

上記以外の形式で特定の類と結びつき得るものとして「～か」がある。「～か」は聞き手が存在すれば疑問を表すが、心内発話においては判断の保留を表すと考えられる。これは「疑う」「怪しむ」などと結びつく。

(30) 彼の教え方に問題があるのではないかと疑ったのである。(若き)

以上に見たものは文末のムード形式だけであり、実際は副詞の共起制限などさらに細かい下位分類が可能であろう。その意味であくまでも暫定的な分類であるが、まとめると以下のようなる。

(31)

	φ	～だろう	～したい	～しよう	～か
願望	×	×	○	×	×
意図	×	×	×	○	×
判断	○	○	×	×	×
仮定	○	?×	×	×	×
誤解	○	×	×	×	×
信念	○	?○	×	×	×
懷疑	×	?○	×	×	○

主体の確定的判断としての心内発話は判断、仮定、誤解、信念などと結びつくが、これに「～だろう」などの蓋然性が加わった場合は誤解のようにことがらを真と確信するものと相容れなくなる。また蓋然性にも程度差があり、「～に違いない」など確信度の高いものは信念などとも結びつきやすくなるようである。「～したい」と「～しよう」はそれぞれ願望、意図としか結びつかない。また判断保留を表す心内発話「～か」は懷疑と結びつく。

このように思考動詞は結びつきうる心内発話のタイプに制約が見られるが、「思う」はここで見たすべてのタイプの心内発話と結びつくことができる。また (26) に見たように他の思考動詞が結びつき得ないタイプのものにも結びつくことができる。

4.2 上位語としての「思う」

前節では思考動詞のタイプと心内発話のタイプの対応を観察し、「思う」はすべてのタイプの心内発話と結びつき、さらに他の思考動詞が結びつき得ないタイプの心内発話とも結びつくことを見た。ここで「思う」以外に「考える」も比較的幅広く結びつくが、以下のように「思う」よりは制限が見られる。

- (32) a. どうりで来ないはずだと思った。
b. #どうりで来ないはずだと考えた。
- (33) a. 「おや？」と思った。
b. #「おや？」と考えた。

「考える」はこのほか「～たいものだ」「～したものだ」や、「やれやれ」「あつ」などの感情を表す形式とも結びつかない。「思う」はこれらに対しても制限がない。「思う」のこうした特徴は「言う」にみられたものと類似している。

無論制限がないといってもあらゆる形式が「～と」に入るわけではなく、2 節で述べたように、伝達など聞き手の存在が想定される表現にはつかない。あくまでも聞き手が想定されない場合において制限がないということである。また、自明ではあるが思考動詞であるが故に「ばぶばぶ」などの言語として全く意味をなさない音声も引用内容に入り得ない。

3 節では「言う」が発語内行為には中立的で、発語行為のみに関わるものとして発話動詞の上位に位置することを見たが、「思う」もこれに平行して考えることができる。音声そのものを表示し得ないという点では発語行為とは異なるかもしれないが、心内発話を行う行為も発語行為とある共通点が見られる。

Austin の発語行為の分析を参照¹⁷すると、発語行為はさらに (a) ある一定の音声 (noises) を発する行為、(b) ある一定の音語 (vocables) あるいは単語 (words) を発する行為、そして (c) ある程度明確な意味 (sense) とある程度明確な言及対象 (reference) とをともなって用語素あるいは複数の用語素を使用する行為の 3 段階に下位分類される。これらは以下のように名付けられている。

- (34) a) 音声行為 (phonetic act)
- b) 用語行為 (phatic act)
- c) 意味行為 (rhetic act)

この発語行為の下位分類を心内発話に当てはめて考えた場合、心内発話はその性質上音声行為としてはありえない。しかし用語行為と意味行為については、いずれも心内発話の性質と矛盾しないものである。そこで発話行為論における発語行為になぞらえて「心内発語行為」という行為を以下のように定める。

- (35) 「心内発語行為」とは発語行為のうち用語行為と意味行為のみを遂行する行為である。

「思う」と他の思考動詞との間に見られる必要条件的関係、そして引用内容への制限のない点から考えると、「思う」は他の思考動詞とは違って、もっぱら心内発語行為の遂行を表示する機能のみを有する動詞と考えることができる。

「言う」が発語行為の遂行を表示する機能のみを有して発話動詞の上位語となっていることと対応する形で、「思う」もまた「心内発語行為」の遂行を表示する機能のみを有して思考動詞の上位語となっていると言える。ここで心内発話を発語行為になぞらえて考える見方は、2 節に見たような、独話のとの類似性から心内発話が一種の発話として捉えられるということによって動機づけられている。

5 まとめ

本稿では「～と言う」と「～と思う」に共通する性質は何であるかということについて「心内発話」という概念を通じて考察してきた。「引用動詞は『言う』類と『思う』類に分けられる」といったように「言う」や「思う」が他の引用動詞の上位語であることは自明のこととされている感があるが、あらためてこれを考察することでそれぞれがどのような関係で他の引用動詞群と上位・下位関係を結んでいるのかが明らかとなった。すなわち「言う」はもっぱら発語行為のみを表し、「思う」は心内発語行為のみを表す機能を有している。

新川 (1994) は「言う」がヲ格名詞句を補語にとる場合 (「ワイウ」) と引用句を補語にとる場合 (「トイウ」) とで、「言う」の意味・機能に違いが生じることを論じている。すなわち前者の場合は「言う」が語彙的に限定されたヲ格名詞句と共起して発話行為描写要素になり、後者の場合

口に出された音声・コトバを提示するようになる。

これは発話動詞の中でも「言う」に特に見られる性質である。思考動詞においても「思う」に対してこれと類似した分析ができるのではないかと見ている。この考察については紙幅の都合上次稿で扱いたい。

注

¹ 仁田（1991）などの用語。

² 森山（1997）の用語。

³ 藤田（1986）、砂川（1989）など。

⁴ 「外的」とは「内的」すなわち「心の内」ということに対応している。

⁵ 発話動詞でも、「階下の住人が、出て行けとわめいていた」のように発話内容の伝達より発話の様態が問題となっているときは二格が現れないことがあるが、その場合でも「～に向かって」によって相手を示すことができる。

⁶ 二格で示される相手の有無に基づいた引用構文の分類は寺村（1981）が行っている。

⁷ 本稿の実例は『新潮文庫の100冊』CD-ROM から引用している。出典は括弧内に作品の頭2文字で示した。

⁸ 藤田（1986）p.210-212 参照。

⁹ 「発語行為（locutionary act）」は「発話行為（speech act）」と訳語が類似しているが、両者は異なる概念を指すので注意を要する。

¹⁰ 例文は藤田（1986）p.222-227 から引用した。

¹¹ 藤田（1986）の分類は必ずしも引用句を必須補語とはしない述語についても考察の対象としているが、砂川（1989）は引用動詞を念頭に置いている。

¹² 新川（1994）も「トイウの機能は発話行為を描写することではなく、口に出された音声を提示すること」（新川1994: p.48）である、と指摘している。

¹³ ただしこの基準も絶対的なものではなく、慣習や道徳に従った相対的なものである。

¹⁴ 「思考を引用する引用文の述部動詞も思考行為のカテゴリー分けをすることによって分類することが可能である」（砂川1989: p.385 注4）

¹⁵ 森山（1988）p.260 の分類を参照。

¹⁶ この分類の名称は加藤（1997）の『と』節を必須要素とする動詞の意味的な分類（加藤1997 p.118-119）を参考に、本稿で対象としない分類項目や動詞については削除・変更し、また不足している項目を補っている。

¹⁷ 『言語と行為』訳本 p.162

参考文献

- Austin, J. L. 1962 *How to Do Things with Words*. Oxford University Press. (坂本百大訳 『言語と行為』 大修館書店)
- 藤田保幸 (1986) 「文中引用句『～ト』による『引用』を整理する」『論集日本語研究(一) 現代編』 宮路裕編 明治書院
- 加藤理恵 (1997) 「『と』節を含む文について」『名古屋大学人文科学研究』 26
- 益岡隆志 (1997) 『複文』 くろしお出版
- 三上 章 (1953) 『現代語方序説』 刀江書院 (1972年くろしお出版より復刻)
- 森山卓郎 (1997) 「『独り言』をめぐって」『日本語文法 体系と方法』 川端善明、仁田義雄編 ひつじ書房
- 新川以智子 (1994) 「『言う』についての一考察」『さわらび』 3 神戸市外国語大学外国語学部
- 仁田義雄 (1980) 『語彙論的統語論』 明治書院
- (1991) 「意志の表現と聞き手存在」『国語学』 165
- 砂川有里子 (1989) 「引用と話法」『講座日本語と日本語教育』 4 北原保雄編 明治書院
- 寺村秀夫 (1981) 『日本語の文法(下)』 国立国語研究所